

# なぜ無ではなく何かが存在するのか

—分析哲学における形而上学の盛衰—

伊 佐 敷 隆 弘

## はじめに

この論文の目標は、「なぜ無ではなく何かが存在するのか」という問いを手がかりにして、「分析哲学における形而上学の盛衰」についてひとつの見通しを手に入れることである。

ライプニッツの「なぜ無ではなく何かが存在するのか」という問いやハイデガーの「無」に関する考察を20世紀初頭の分析哲学者たち（カルナップ、エア、ライルたち）は「無意味だ」と批判した（第Ⅰ節）。ところが、20世紀末に至ると「分析形而上学」というジャンルが市民権を得、ライプニッツの問いはヴァン・インワーゲン、ロウ、パーフィットなど多くの分析哲学者たちによって正面から論じられるようになった（第Ⅱ節）。分析哲学者たちの形而上学への評価を変化させた要因は何か。それは、「検証原理が元々持っていた難点」、「クワインの全体論」、「ストローソンの記述的形而上学」、「クリプキの固定指示詞と可能世界論」の4つである（第Ⅲ節）。

## I 形而上学への批判

### 1 ライプニッツとハイデガーによる「存在への問い」

「なぜ無ではなく何かが存在するのか」という問いを最初に提起したのはライプニッツ（Gottfried Wilhelm von Leibniz, ドイツ, 1646～1716年）である。17世紀末、ライプニッツは論文「事物の根本的起原<sup>1)</sup>」（1697年11月23日執筆）の中でこの問いを立て、神の存在によって答えている。即ち、神が「事物の超世界的な究極理由」である、と。

およそ230年後の20世紀初頭、ハイデガー（Martin Heidegger, ドイツ, 1889～1976年）は、フライブルク大学教授就任講演「形而上学とは何か<sup>2)</sup>」（1929年7月24日）の末尾において、この問いは「形而上学の根本的な問いである」と言う。ハイデガーはこの講演において「無（das Nichts）」に焦点を合わせ「無とは何か」を検討することによって最終的にこの問いに至る。その検討の途上において、彼は「無は自ら無化する」と述べている。即ち、「全体として滑り去りつつある存在事物を全体として拒

---

<sup>1)</sup> [Leibniz 1697].

<sup>2)</sup> [Heidegger 1929].

否しつつ指示することが、即ち、無化（das Nichten）である。無化は存在事物の消滅でも〔人間による〕否認でもない。無は自ら無化する（Das Nichts selbst nichtet.）のである。〔…〕無化によって、存在事物はまったく奇妙さにおいて開示される。〔…〕無の開示性を根拠としてのみ『なぜ』という問いが発せられる。〔…〕無そのものが強いる『なぜ無ではなく存在事物が存在するのか』という形而上学の根本的問い」とハイデガーは述べている。

彼のこの発言の意味を明らかにするにはハイデガー哲学全体への理解が必要であるが、ここで私の解釈を論証抜きに述べると次の通りである。我々の眼前にあるのは存在事物だけであり、無はどこにもない。無があれば、それはもはや無ではなく有である。無は端的に存在しない。しかし、現にある存在事物すべてが存在しない可能性がある。少なくともそのような可能性を考えることができる。だからこそ、我々は「なぜ無ではないのか」と問うことができる。そして、「無は自ら無化する」と述べることによってハイデガーが強調したいのは、この「無の可能性」は人間が恣意的に想定したものではなく、存在それ自体が持っている可能性だということである。

## 2 論理実証主義者カルナップによる形而上学批判

ハイデガーの「無は自ら無化する」という命題を「ナンセンスだ」と激しく非難したのが、論理実証主義者カルナップ（Rudolf Carnap, ドイツ出身、アメリカへ亡命、1891～1970年）である。奇しくもカルナップは、ハイデガーが教授を務めたフライブルク大学の卒業生であった。彼は論文「言語の論理的分析による形而上学の除去<sup>3)</sup>」（1932年）において、「無は自ら無化する」という命題は「二重の意味で無意味だ」と断罪する。第一に、「無化する」という語が検証不可能であるから無意味である。第二に、「無」を主語にした「無が～」という語順が論理的構文論に違反するから無意味である。即ち、「無が～」ではなく、「～が存在しない」と述べるのが正しい。（論理記号を使って書けば、「 $\neg \exists x F(x)$ 」が正しい。このように書けば、「無」という主語は現れない。）

カルナップに言わせると、形而上学的命題は、事実の記述（Darstellung, description）ではなく、人生に対する感情や態度の表現（Ausdruck, expression）である。音楽家であれば音楽を用いて表現することを、音楽の才能がないがゆえに、言葉で表現しているのが形而上学者である。即ち、形而上学者とは「音楽の才能のない音楽家」である。しかも、形而上学者は、「自分は感情を表現しているのではなく、事実を記述しているのだ」と自らを欺き、他人を欺いている。カルナップはこのようにハイデガーと形而上学とを激しく非難する。

## 3 論理実証主義者エアによる形而上学批判

論理実証主義をイギリスに紹介したのはエア（Alfred Jules Ayer, イギリス、1910～1989年）であるが、エアにとっても形而上学は除去すべき対象であった。彼の著『言語・真理・論理<sup>4)</sup>』（1936年）

<sup>3)</sup> [Carnap 1932].

<sup>4)</sup> [Ayer 1936]. エアの自伝（[Ayer 1977, p.166]）によると、この本はエアの所属するオックスフォード大学の学生

の第1章は「形而上学の除去（The Elimination of Metaphysics）」と題され、そこにおいてエアは「形而上学的命題は真でも偽でもなく無意味（senseless）である」と述べている。

エアは命題を「アプリオリ（a priori）な命題」、「経験的（empirical）命題」、「形而上学的（metaphysical）命題」の3種類に分ける。

アプリオリな命題は、「言語の用法に関する規約によって真となるトートロジー」であって、分析的かつ必然的に真である。「アプリオリ」とは「経験によらずに正当化される」ということであり、「分析的」とは「意味によって真」ということである。論理学や数学に現れる命題や言語分析の結果を表す命題がアプリオリな命題の具体例である。

経験的命題は、「検証されることによって確からしさが増す仮説」である。「仮説」だというのは、法則命題や過去時制命題のように100%検証できない命題も経験的命題として認めたいからである。そして、エアは、命題の有意味性の基準として「検証原理」を立てる。検証原理とは「アプリオリな命題以外で有意義なのは、経験的な観察によって検証可能（verifiable）な命題だけである」という原理である。この検証原理が論理実証主義者たちによる形而上学批判の根拠になっている。

即ち、検証原理によれば、形而上学的命題は「真でも偽でもない命題」即ち「無意味な擬似命題（pseudo-proposition）」である。形而上学的命題はそれを検証できる経験が存在しないから、検証原理に従えば、無意味である。「真とか偽以前である。意味をなさない」ということである。したがって、また、エアに言わせると、哲学的論争における、観念論（idealism）と实在論（realism）の主張はどちらも意味をなさないし、一元論（monism）と多元論（pluralism）の主張もどちらも意味をなさない。

#### 4 日常言語学派ライルによる形而上学批判

エアの指導教員であったライル<sup>5)</sup>（Gilbert Ryle, イギリス, 1900～1976年）は論理実証主義者ではなく、日常言語学派<sup>6)</sup>に属しているが、論文「系統的に誤解を招く諸表現<sup>7)</sup>」（1932年）において、「形而

---

たちには好評だったが、教師たちには不評だった。「この本が出版できたのはスキャンダルだ」と言った者もいたそうである。実際、オックスフォード大学教授のペイトン（[Paton 1961, p.346]）は「[[エアのこの本は] 論理実証主義の本性を（即ち、その恐ろしさを）見せてくれた。見事に間違っていると思われたが、私たちが何に直面しているかを分かせてくれた」と述べている。

なお、1930年にオックスフォード大学で開催された第7回国際哲学会において、ウィーン大学のシュリッックが「哲学の将来」（[Schlick 1931]）と題する発表をおこなった。このとき、シュリッックはライル（エアの指導教員）に会っている。ライルは後にエアにウィーン大学への留学を勧め、エアは実際1932～1933年にシュリッック宛のライルからの紹介状を持ってウィーン大学に留学している。1930年のシュリッックとライルの出会いがそのきっかけになったのかもしれない。ちなみに、この第7回国際哲学会には日本から桑木巖翼が参加し（[桑木 1936, pp.365-410]）、シュリッックのこの発表を聴いている。

5) ライルは雑誌『Analysis』の創設者の1人である。この雑誌はライルの論文「系統的に誤解を招く諸表現」発表の翌年1933年に創刊された。（[Mets 1938, p.534]による。）

6) 日常言語学派とは、日常言語を注意深く分析することによって哲学的問題の解決を目指した人々のことである。日常言語学派に属するのは、ライル（1900～1976）、H. L. A. ハート（1907～1992）、オースティン（1911～1960）、R. M. ヘア（1919～2002）、ストローソン（1919～2006）などである。なお、この5人は皆オックスフォード大学の教員である。

7) [Ryle 1932].

上学的哲学者はこの上ない重罪人 (greatest sinner) である」と述べている。この論文は前述のカルナップの論文「言語の論理的分析による形而上学の除去」と同じ年に発表されている。

ライルのこの論文は日常言語学派のスタートになった論文だと言われている<sup>8)</sup>。「系統的に誤解を招く表現 (systematically misleading expression)」とは、表現の持つ文法形式 (grammatical form) が、事実の持つ論理形式 (logical form) を適切に表していないような表現のことである。そのような表現は存在者を増加させるよう我々を誘惑する。具体的には、①擬似存在論的言明 (quasi-ontological statement)、②擬似プラトン主義的言明 (quasi-platonic statement)、③擬似記述 (quasi-description) の3種類がある。これらの表現を適切な文法形式の表現へ書き直すことによって、事実の真の論理形式を明らかにできる。これが哲学的分析であり、ライルによれば、哲学の唯一の機能である。

ここでは、①の擬似存在論的言明だけを取り上げる。次の2つの言明を比較しよう。

「カポネは哲学者ではない。(Capone is not a philosopher.)」

「サタンは実在しない。(Satan does not exist.)」

「前者の言明がカポネという者の或る特性を否定しているように、後者の言明もサタンという者の或る特性を否定している」と考える哲学者がいるかもしれない。しかし、サタンは実在しない。とすれば、この言明は何についての言明なのか。「サタン」という観念についての言明なのか。或いは、「非現実的存在者としてのサタン」についての言明なのか。このようにして、存在者の種類を増やしたくなってしまふ。このように存在者を増やすと「丸い四角」のような自己矛盾した存在者まで存在することになるだろう。しかし、それは、この言明の文法形式つまり見かけにだまされているのであって、「サタンは実在しない」という言明を次のように書き直せば存在者は増やさなくて済む。

「なにものも悪魔的で『サタン』と呼ばれていない。」

(Nothing is both devilish and called "Satan.")

この言明には「悪魔的」という述語、即ち、実在する人や生き物に適用される述語が現れているが、主語として、サタンの観念や非現実的存在者としてのサタンを必要としていない。つまり、このように書き換えれば、存在者を増やさなくても済む。要するに、「サタンは実在しない」という言明は誤解を招く表現である。

同様に、「神は実在する」という言明も「ボールドウィン (当時のイギリスの政治家) は実在する」という言明も誤解を招く表現である。それゆえ、ライルは言う。「あたかも重大なことを語っているかのように『実在 (reality)』や『存在 (being)』を命題の主語にして語ったり『実在的 (real)』を述語

<sup>8)</sup> [Ryle 1932] の邦訳の「編者解説」(坂本百大) p.260.

にして語ったりする形而上学的哲学者はこの上もない重罪人である。なぜなら、彼らの語ることは、よくて系統的に誤解を招く表現であり、最悪の場合は無意味（meaningless）だからである。」

このように、20世紀初頭の分析哲学において、形而上学はカルナップ、エア、ライルたちによって、「真偽以前に意味をなさない」というふうに厳しく非難された。ところが、20世紀末以降、「形而上学」という名前からそのような侮蔑的なニュアンスは完全に消え去っている。哲学のアンソロジーやハンドブックのタイトルに「形而上学」という言葉が普通に使われ、「分析形而上学（analytic metaphysics）」という分野が生まれるに至っているのである。

## II 分析形而上学の登場

分析形而上学においては、「普遍（universal）と特殊（particular）」、「存在（existence）と同一性（identity）」、「個体（individual）と属性（attribute）」、「様相（modality）と可能世界（possible world）」、「決定論（determinism）と自由（freedom）」などの、古代中世以来の伝統的な問題が熱心に論じられている。

「なぜ無ではなく何かが存在するのか」という問いもそこでは正面から堂々と論じられている。この問いが問題にするのは、我々の目の前にある机や山や動物や太陽や星のような具体的存在物である。自然数のような抽象的存在者について問うているわけではない。抽象的存在者の存在については哲学者の間で争いがある<sup>9)</sup>が、具体的存在物の存在については、よほどの懐疑主義者で無いかぎり、否定する人はいない。そのような具体的存在物の全体について「そもそもなぜ存在するのか」と問うのがこの問いである。

そして、この問いに対して何か他の具体的存在物を存在の原因としてあげて答えることはできない。なぜなら、その「他の具体的存在物」について「そもそもそれはなぜ存在するのか」という同じ問いが繰り返されるだけだからである。なお、以下において、この問いを簡略に「存在の謎（riddle of existence）」と呼ぶことにする<sup>10)</sup>。

分析形而上学の中で「存在の謎」がどのように論じられているのかを見てみよう。1996年7月アイランドのダブリン大学でアリストテレス協会とマインド協会が大会を共同開催した。アリストテレス協会もマインド協会も100年以上の歴史を持つ由緒ある哲学の学会である。このときの大会では7つのシンポジウムが開かれたが、その1つが存在の謎を扱うものであり、「そもそもなぜ何かが存在するのか。（Why is there anything at all?）」と題するものであった。報告者は、ピーター・ヴァン・インワーゲン（Peter van Inwagen, アメリカ, 1942年～）とジョナサン・ロウ（Jonathan Lowe, イギリス, 1950～2014年）という分析形而上学を代表する英米の2人の哲学者であった。

<sup>9)</sup> 実在論と反実在論の間の争いである。

<sup>10)</sup> 筆者の知る限りでは、この呼び方はレスチャー（[Rescher 1984]）が最初に用いたものである。

では、まず、ヴァン・インワーゲンの議論から見てみよう。

## 1 ヴァン・インワーゲンの確率説

彼の主張は次の推論にまとめることができる<sup>11)</sup>。

前提 1：論理空間は無限に多くの可能世界から成る。

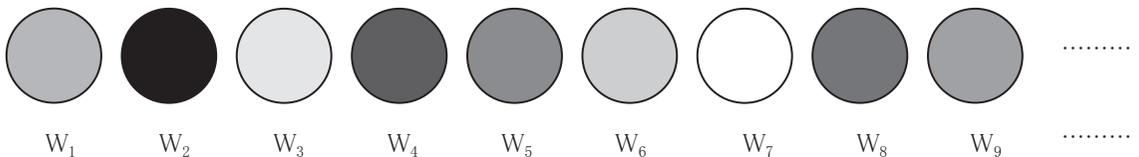
前提 2：いかなる具体的存在物も含まれていないような可能世界は、ただだか 1 つしかない。〔そのような可能世界を「空世界」と呼ぼう。〕

前提 3：どの可能世界も、それが現実世界である確率は等しい。

結論 4：したがって、空世界が現実世界である確率は限りなくゼロに近い。

最後の結論を導くところをもう少し詳しく述べれば、次のようになる。「可能世界が無数個あるのに対し、空世界は 1 つしかない。したがって、空世界が現実世界である確率は無限分の 1 即ち限りなくゼロに近い。逆に、空世界でない世界（なんらかの具体的存在物が含まれている可能世界）が現実世界である確率は限りなく 1 に近い。だから、無ではなく何かが存在しているのである。」このように、ヴァン・インワーゲンの主張は「何かが存在する確率の方が、何も存在しない確率よりも圧倒的に大きい」とするものである。そこで、彼の主張を「確率説」と名付けることにする。

図を用いて説明しよう。



$W_1$  や  $W_2$  は別々の可能世界<sup>12)</sup>である。色の濃い薄いがあるが、 $W_7$  だけが真っ白である。これは「 $W_7$  に具体的存在物がまったく含まれていない」つまり「 $W_7$  は空世界だ」ということを示している。

具体的存在物が含まれる世界には様々な可能性がある。例えば、今私がある店で食事をしているとしても、「あの電車に乗り損ねていたら今この店で食事していなかったかもしれない」という可能性がある。その場合、この現実世界とは別の可能世界が想定され、「私は来店していないけれど他の点に関してはこの店とそっくり同じ店」がその可能世界には含まれていることになる<sup>13)</sup>。

<sup>11)</sup> [van Inwagen 1996].

<sup>12)</sup> 可能世界の本性に関しては、「概念説（虚構説）」、「組み合わせ説（実在する要素の可能な組み合わせ）」、「抽象説（命題・事態・性質の集まり）」、「可能世界実在論（すべての可能世界はこの現実世界と同じように存在している）」などの議論がある。

<sup>13)</sup> もし決定論が正しいなら、私は今この店に来る以外のことは何もできなかったということになる。決定論は「現実以外は不可能だ」という主張だから、現実世界だけが存在し、いかなる可能世界も存在しない。したがって、空なる

可能世界は無限に多くある。というのは、例えばこの店の中の気温が実際よりも少しだけ高かった可能性を考えることができるからである。温度は連続的に変化するから、この「少しだけ」というのは無限に細かく区別することができる。つまり、この店の気温がとりえた様々な可能性を考えるだけで、無数の可能世界が想定できることになる。これが「可能世界の個数は無限だ」という前提1の理由である。

しかし、具体的存在物が含まれていない  $W_7$  に関しては多様性の可能性がまったくない。だから、具体的存在物のない可能世界、即ち、空世界は1つしかない。これが前提2である。

したがって、前提3の「すべての可能世界は等確率」が成り立つ<sup>14)</sup>とすると、空世界である  $W_7$  が現実世界である可能性は、分母が無限で分子が1であるから、限りなくゼロに近くなる<sup>15)</sup>。逆に言うと、 $W_7$  以外の世界、即ち、何らかの具体的存在物が含まれている世界が現実世界である確率は限りなく1に近くなる。これが「なぜ無ではなく何かが存在するのか」という問いに対するヴァン・インワーゲンの答えである<sup>16)</sup>。

この答えはいろいろと批判することが可能であるし、現に批判されている<sup>17)</sup>。しかし、ここでは批判的検討はせずに、シンポジウムのもう一人の報告者であるロウの答えを見ることにしよう。

## 2 ロウの必然説

彼の主張は次の推論にまとめることができる<sup>18)</sup>。彼の主張を「必然説」と名付けよう。

---

可能世界も存在しない。要するに、決定論は空世界の不可能性を含意するから、「なぜ何かが存在するのか」という問いに対する答えになる。決定論は必然説の一種である。なお、ヴァン・インワーゲンは決定論が成り立つ場合（「スピノザ主義」と呼んでいる）と成り立たない場合とに場合分けして証明している。この論文では成り立たない場合だけを取り上げた。

14) ヴァン・インワーゲンによれば、孤立している（外部から影響を受けない）系の任意の極大状態（任意の状態の肯定か否定が必ず含まれている状態。つまり、最も詳しく分けられている、それゆえ、互いに排反的な状態）は等確率である。このことはアプリアリに確信できる。これに対して、孤立していない系（例えば、私のコンピュータ）の場合、その可能的状態は等確率ではない。（英語の文書が含まれる確率とウルド語の文書が含まれる確率は異なる。というのは、コンピュータの外部にいる私から影響を受けるからである。）また、極大でない場合（最も詳しく分けられていない場合）も等確率ではない。ところで、現実世界は孤立した系である。（現実世界の外部はないから、外部から影響を受けない。）また、可能世界は極大状態である。（任意の状態の肯定か否定が必ず含まれている。互いに排反的である。）

15) 「限りなくゼロに近い」は数学的に言えば「ゼロ」と等しいが、「不可能」ではない。ロウ（[Lowe 1996, p.113]）が指摘するように、実際、我々の住むこの現実世界も無数の可能世界の1つに過ぎないから、それが現実である確率は限りなくゼロに近い。しかし、不可能ではない。もし不可能であったら、我々の住むこの世界は現実世界ではありえないことになってしまう。

16) なお、ヴァン・インワーゲン以前に、ノージック（[Nozick 1981, Ch.2]）が同じ内容の証明を提出している。

17) 例えば、前提3に対して、ロウ（[Lowe 1996, pp.118-120]）は、「可能世界に確率を割り当てるヴァン・インワーゲンの議論はナンセンスである」と批判する。ロウによれば、「可能世界とは事実の総計であるが、事実（fact）にはよく定義された同一性条件がないから、事実は対象（object）ではなく、事実の総計である可能世界も対象ではない。したがって、我々による記述から独立に可能性を分割することはできない〔論理空間を等確率な複数の可能世界に分割することはできない〕」からである。

また、ボールドウィン（[Baldwin 1996, p.237]）は「84歳のムアがいる世界と123歳のムアがいる世界が等確率とは思えない」（ムアは実際には84歳で亡くなった。）と批判する。（尤も、ヴァン・インワーゲンからすれば、おそらくこれは極大状態ではない。つまり、十分に詳しく分けられていない。）

18) [Lowe 1996], [Lowe 1998b], [Lowe 2002].

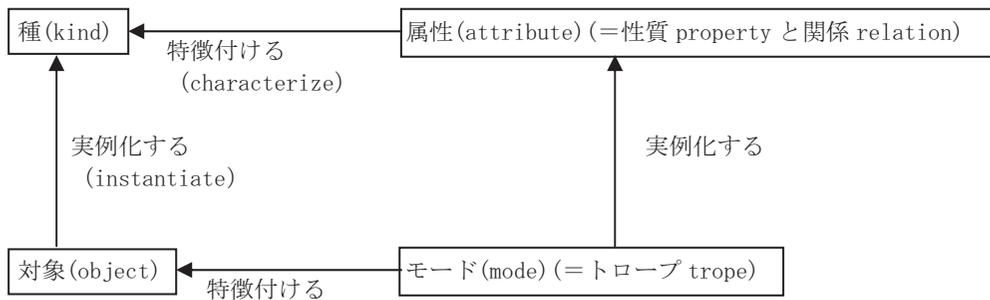
前提 1 : 必然的に存在する抽象的存在者 (例えば, 自然数) がある.

前提 2 : 抽象的存在者の存在は, 具体的存在物の存在に依存する.

結論 3 : したがって, 何らかの具体的存在物が存在することは必然的である. (即ち, 空世界は不可能である.)

前提 1 が言っていることは「自然数は必然的存在者である. 言い直せば, 自然数という抽象的存在者はすべての可能世界に存在している」ということだが, その根拠は, ロウによれば, 自然数に関する命題 (例えば,  $1 + 1 = 2$ ) が必然的真理, 即ち, すべての可能世界において真だということである. つまり, この命題を真にする事実 (fact) がすべての可能世界に存在しており, その事実には自然数 1 や 2 の存在が含まれているということである<sup>19)</sup>.

前提 2 の背景にはロウの存在論がある. それは最も基礎的な存在者を 4 つに分類する 4 カテゴリー論 ([Lowe 2006]) である. 図示すると次のようになる<sup>20)</sup>.



ロウの存在論は「種」「属性」「対象」「モード」の 4 つのカテゴリーからできている。「種」と「属性」は普遍 (universal) であり, 「対象」と「モード」は個体 (particular) である. 個体は普遍の実例 (instance) になっている. 即ち, 対象は種の実例であり, モードは属性の実例である. 例えば, 今, 机の上に 3 個のトマトがあるとしよう. これらはトマトという種に属する 3 つの別々の対象である. それぞれのトマトは同じ色合いの鮮やかな赤色をしているが, それらの色はトマトという 3 つの対象とそれぞれ同じ場所に存在している. つまり, それらの色は, 別々の場所にあるから, 3 つの別々の個体である. このような「個体としての性質」は「モード」(或いは「トロープ」) と呼ばれる. 「鮮やかな赤色」という同

<sup>19)</sup> 尤も, 必然的真理から何らかの対象 (抽象的であれ具体的であれ何らかの対象) の必然的存在を導いてよいかどうかに関しては議論があるから, 前提 1 はすんなりとは認められないであろう. 例えば, 金星と金星自身の自己同一性は必然的であろうが, そのことから「すべての可能世界に金星が存在する」ことは帰結しないであろう. 金星が存在するすべての可能世界において, 金星と金星自身が自己同一であれば足りるのではないか. 同様に, 自然数が存在するすべての可能世界において  $1 + 1 = 2$  であれば, この等式は必然的に真だとしてよいのではないか. とすれば, ロウの前提 1 は怪しい.

<sup>20)</sup> [Lowe 2006, Ch.2.1]. なお, ロウの 4 カテゴリー論については [伊佐敷 2012] を参照せよ.

じ属性（これは普遍である）の3つの実例であるモード（これは個体）が別々の場所に存在している。ロウの存在論はこのような4つのカテゴリーからできている。

そして、ロウによると、個々の対象としてのトマトから離れて「トマト」という種がそれだけで自立して存在することはできない。種の存在は対象の存在に依存している。同様に、個体としての性質（即ちモード）から離れて、普遍としての性質（即ち属性）が存在することはできない。つまり、普遍が実例化されず個体から独立して存在する、ということは不可能である。このことはロウの存在論の中心的主張である。

そして、ロウによると、自然数という抽象的存在者は種である。即ち、集合（という対象）によって実例化される種である。例えば、2という自然数（即ち、種）はあらゆるペア（即ち、要素が2個の集合という対象）によって実例化される。我々の靴や耳や目などそれぞれが右と左でペアになっているが、それら具体的存在物のペア（即ち、対象）はすべて2という自然数（即ち、種）の実例である。そして、種の存在は対象の存在に依存しているから、2という自然数の存在は何らかの具体的存在物のペアの存在に依存している。つまり、具体的存在物がまったく存在しない可能世界（空世界）では自然数という抽象的存在者も存在できない<sup>21)</sup>。これが前提2である。

結局、前提1によれば、自然数2という種（抽象的存在者）はすべての可能世界に存在しており、前提2によれば、自然数2が存在するためには何らかの「具体的存在物のペア」がすべての可能世界に存在していなければならない。（ただし、すべての可能世界で共通のペアである必要はない。可能世界ごとに異なるペアであってもかまわない<sup>22)</sup>。）こうして結論3が出てくる。

なお、自然数に関するロウの主張は数学の哲学の中では少数派だと思われる<sup>23)</sup>から、ロウの議論自体に対しても異論のあるところだろう。

### 3 パーフिटのセレクトター論

しかし、存在の謎のような形而上学的問いに対してそもそもどのようにして答えることができるのだろうか。シンポジウムの報告者ではないが、存在の謎に関する論証の持つ構造についてパーフィット（Derek Parfit, イギリス, 1942年～）がおこなった議論<sup>24)</sup>を取り上げよう。

21) 実は、もう少し厳密に言うと、ペア（要素が2つの集合）そのものは抽象的対象であり、その存在はその要素である具体的存在物（左右の靴など）の存在に依存しているとロウ（[Lowe 1996, pp.115-116]）は考えている。つまり、ロウの前提2は、具体的対象（靴などの具体的存在物）—抽象的対象（集合という抽象的存在者）—抽象的普遍（自然数という抽象的存在者）という3段階になっている。

22) つまり、具体的存在物が必然的存在者である必要はない。つまり、前提1の抽象的存在者の必然性が事象様相（de re modality）であるのに対し、結論の必然性は言表様相（de dicto modality）である。例えば、「宝くじの当選者が必ず存在する」と言う際の必然性は言表様相である。他方、「必ず当選する」という性質（これは事象様相）を持つ人は存在しない。このように、これら2つの必然性は異なる。

23) 例えば、ロウ（[Lowe 1998, p.254, 特に n.8]）は、「空集合は虚構だ」と主張するが、仮に空集合の存在を認めてやれば、空集合 $\emptyset$ から出発し、空集合を要素とする集合 $\{\emptyset\}$ を考え、さらに、それを要素とする集合 $\{\{\emptyset\}\}$ を考えることによって、具体的存在物がなくても、自然数を構成することができる。この場合、前提2は成り立たない。

24) [Parfit 1992], [Parfit 1998].

或る可能性が或る特徴を持つがゆえに現実化する場合、この特徴をパーフィットは「セクター (Selector)」と呼ぶ。現実がいかなるものであるかをその特徴が選択していることになるからである。したがって、一つのセクターを挙げることは、存在の謎への一つの答えになる。例えば、「最善 (best)」、「最単純 (simplest)」、「豊かで多様 (full and varied)」、「最も非恣意的 (least arbitrary)」、「根本法則がエレガント」などがセクターになりうる。

例えば、「最善」という特徴がセクターだと主張する最善説によれば、あらゆる可能世界のうちで最も善い世界が現実世界である。そして、非存在より存在の方が善いだろうから、いかなる具体的存在物も含んでいない空世界（先ほどの図で言えば  $W_7$ ）は現実世界ではないはずだということになる<sup>25)</sup>。

これに対し、「最単純」という特徴がセクターなら、具体的存在物をまったく含まない空世界が最も単純であろうから、逆に空世界  $W_7$  が現実世界であったらう。

また、「豊かで多様」という特徴がセクターであったら、現実世界は1つとは限らない、すべての可能世界 ( $W_1$ ,  $W_2$ ,  $W_3$  などのすべての可能世界) が全部、現実化しているであろう。SF 小説に出てくるパラレルワールドのようなものである。その場合、ありとあらゆる可能性がどこかの世界で現実化しているのであるから、それは実に「豊かで多様」であろう。これは「可能世界実在論」と呼ばれる立場<sup>26)</sup>である。

また、「最も非恣意的」という特徴をセクターとするのは、前述のヴァン・インワーゲンの確率説やロウの必然説の立場である。

このように、セクターを挙げることは、存在の謎へ答えることを意味している。

さらに、「セクターなどない」という立場もありうる。「何かが存在していることに理由はない。それは、<sup>なま</sup>生の事実 (brute fact) だ」という立場である。これは「生の事実 (brute fact) 説」と呼ばれる。

さて、このように、セクターの複数の候補が考えられると、どのような基準でそれらのうちの1つを選ぶことができるのか、という第2レベルの問いが生じてくる。

最善説を例として存在の謎に関する論証の持つ構造を述べると次のようになる。

第1レベルの問い：「そもそもなぜ何かが存在するのか。」（存在の謎）

第1レベルの答え：「非存在より存在の方が善いから。」（最善説の答え）

第2レベルの問い：「なぜ善い可能性は現実化するのか。（なぜ最善性がセクターなのか。）」

第2レベルの答え：「それには理由はない。（<sup>なま</sup>生の事実である。）」

この第2レベルの問いは、「複数のセクターのうちからなぜ最善性を選ぶべきなのか」と問うてい

<sup>25)</sup> ただし、ライプニッツ ([Leibniz 1697]) の場合、「神は必然的存在者であり、神は最善の世界を創造する」という必然説と最善説の2段構えになっている。パーフィットが念頭においている最善説はレズリー ([Leslie 1979]) のものである。レズリーは、神の存在そのものも最善説で説明しようとしている。

<sup>26)</sup> 可能世界実在論とは、デイヴィッド・ルイス ([Lewis 1986]) の立場である。

るわけである。これに対し、「理由はない」という答え方（上の第2レベルの答え）がある。しかし、第2レベルの問いに対して「善のうちには、存在へと向かう力が含まれているからだ」というふうに答えて粘ったとすると、今度は第3レベルの問いが現れる。即ち、「なぜ善にはそのような力が含まれているのか」という問いが現れる<sup>27)</sup>。

そうすると、遅かれ早かれ生の事実に訴えるしかなくなる。しかし、パーフィットは「だからと言って、存在の謎に答えることが無意味になるのではない」と言う。なぜなら、存在の謎に答えようと努めることは、セクター、即ち、現実世界の持つ最も根本的な特徴を記述することでもあるからである。例えば、最善説は「現実世界の根本的特徴は最善ということだ」と主張していることになる。つまり、第1レベルの答えは、説明にはならないとしても、少なくとも世界の記述として意味を持ちうるのである。

「存在の謎」をめぐるヴァン・インワーゲンやロウやパーフィットたちの主張は多くの議論をひき起こした。現在も議論は継続中である<sup>28)</sup>。しかし、いずれにしても、このような極めて思弁的な形而上学的議論が分析形而上学として市民権を得ているのが、現代の分析哲学である。

### Ⅲ 形而上学の復興

それでは、なぜ20世紀初頭のカルナップ、エア、ライルたちによる形而上学批判は力を失い、形而上学は復興できたのか。この点に焦点を当てて、20世紀の分析哲学の歴史を振り返ってみると、主な要因として4つ挙げることができる。即ち、「検証原理が元々持っていた難点」、「クワインの全体論」、「ストローソンの記述的形而上学」、「クリプキの固定指示詞と可能世界論」の4つである。以下、順に見ていこう。

#### 1 検証原理が元々持っていた難点

一つめの要因は、検証原理そのものに問題があったということである。即ち、その論理的身分と厳密な定式化の困難さという2点である。

論理実証主義者が形而上学を批判するときの根拠は検証原理だった。即ち、「検証可能な命題だけが有意義だ」という原理だった。しかし、当時すぐに指摘されたのは、「検証原理そのものは検証可能な

---

<sup>27)</sup> このように問いのレベルが上がっていくことは、第1レベルの答えが「生の事実」説である場合も同様である。「生の事実」説（第1レベル）に対して「なぜ存在の謎には答えがないのか」（なぜ「生の事実」説は正しいのか）という第2レベルの問いがありうる。そして、第2レベルの答えとして「存在の謎には答えがありえないから」（必然説）や「それにも答えはない」（「生の事実」説）がありうる。

<sup>28)</sup> パーフィット、ロウ、ヴァン・インワーゲン、ノージック（[Nozick 1981]）、レッシャー（[Rescher 1984]）、コニー（[Conee 2005]）その他たくさんの分析哲学者によって1980年代以降現在までこの問いに関する多くの論文が発表され続けている。

のか」という問題であった。エアはこれに対して「検証原理は経験的仮説ではない〔から検証可能ではない〕。検証原理は定義だと見なしてほしい<sup>29)</sup>」と答えている。定義は経験的仮説でも分析的命題でもないということだが、とすれば、検証原理の適用を受けない有意な命題が存在することになってしまう。かといって、「定義は提案であるから検証原理の適用を受けないのだ<sup>30)</sup>」ということであるのなら、提案を受け入れるかどうかは受け手の側が決めることであり、提案自体が何かを断罪するほどの力を持つのは無理であろう。

また、検証原理には「論理的に厳密な定式化が困難だ」という別の問題もあった。一方で経験的命題を許容し、他方で形而上学的命題を排除するように、過不足なく検証原理を定式化することは、予想以上に困難だった。エアは40年ほど経ってからこう語っている<sup>31)</sup>。「検証原理はこれまで正確に定式化されたことはなかった。私も何度か定式化を試みたが、結果は強すぎたり、弱すぎたりして、うまくいかなかった。」このように、形而上学批判の根拠である検証原理そのものにもともと問題があった。

## 2 クワインの全体論

エア（イギリス、1910～1989年）とクワイン（Willard van Orman Quine, アメリカ、1908～2000年）はちょうど同じ時期（1932～1933年）にウィーン大学に来て、一緒に論理実証主義を学んだ。2人とも20代の若者だった<sup>32)</sup>。前述のように、エアはイギリスに論理実証主義を伝えた<sup>33)</sup>。他方、検証原理から形而上学批判の力を奪ったのは、皮肉なことに、クワインだった。

クワインは、「経験主義の2つのドグマ<sup>34)</sup>」(1951年)という論文において、論理実証主義の根本テーゼ、即ち、「還元主義<sup>35)</sup>」〔=検証原理〕と「分析・総合の区別<sup>36)</sup>」を批判した。そして、それに代えて、全体論 (holism) を主張した。即ち、「外的世界に関する諸言明は、個々独立にはではなく、一つの統合体 (corporate body) として、感覚的経験の裁きに直面する」と主張した。クワインのこの主張がいかんして検証原理から形而上学批判の力を奪ったかを説明しよう。

検証原理に言う「命題の検証」とは何か。既にエアにおいても、個々の命題が直接に検証されるケースだけでなく、「命題Pと他の諸前提との連言から演繹される観察命題が検証されることによって、元

<sup>29)</sup> [Ayer 1936] の第2版(1946年)で加筆された“APPENDIX”においてそのように述べている。

<sup>30)</sup> [Ayer 1987, p.28] によれば、[Ayer 1936] での検証原理は「指図的定義 (prescriptive definition)」として述べられた。つまり、検証原理は提案だったということである。

<sup>31)</sup> プライアン・マギーとの対談 ([Ayer 1978, p.131=邦訳 p.152]) での発言である。[Ayer 1987, pp.27-28] でも同じことを述べている。

<sup>32)</sup> エア ([Ayer 1977, p.134]) によると、クワインはエアよりもずっとドイツ語がうまかったそうである。

<sup>33)</sup> エア ([Ayer 1977, p.299], [Ayer 1987, p.24]) によると、『言語・真理・論理』は12か国以上の言語に翻訳されたが、最もよく売れたのは日本語訳だった。つまり、エアは論理実証主義を日本に伝える上でも大きな役割を果たした。

<sup>34)</sup> [Quine 1951].

<sup>35)</sup> 「還元主義」とは、「有意な命題は、直接経験を記述する名辞からの論理的構成物と同値である」という考えである。論理実証主義批判のこの文脈では、検証原理を指す。

<sup>36)</sup> 「分析・総合の区別」とは、「分析的真理（即ち、意味に基づく真理）と総合的真理（即ち、事実に基づく真理）の間には根本的な違いがある」という考えである。

の命題Pが検証される」というケースが認められていた<sup>37)</sup>。例えば、「この棒は鉄でできている」という命題Pを検証する方法として、「磁石を近づける」というやり方がある。この命題Pと、「鉄はみな磁石に引き付けられる」という一般法則や「この物体は磁石である」という別の命題との連言を作れば、そこから、「この棒はこの物体に引き付けられる」という観察命題Qが演繹される。そして、この観察命題Qを検証することによって、元の命題P「この棒は鉄でできている」が検証されることになる<sup>38)</sup>。要するに、「命題Pの検証」には、「命題Pが経験によって直接検証される」ケースと「(命題P + 他の前提→観察命題Q)」という含意関係に基づき、命題Pが含意する観察命題Qを検証することによって、命題Pが間接的に検証される」ケースとがある。

しかし、後者の間接的検証の手続きがなりたつためには、それらの前提があらかじめ検証されていないといけない。即ち、「鉄はみな磁石に引き付けられる」という一般法則や「この物体は磁石である」という別の命題が検証済みでなければならない。しかし、それらの検証のためには、さらなる他の前提が必要であろうが、その「さらなる他の前提」も検証済みでなければならない。こうして検証済みでなければならない命題の範囲はどこまでも広がって行くであろう。

このように考えると、個々の命題を単独で検証できるケース（直接検証）はむしろ少ないように思われる。そして、クワインは「そのようなケースは実はまったく無いのだ」と主張する。これがクワインの全体論である。

実際、「この棒はこの物体に引き付けられる」という観察命題Qですら、単独では検証できない。棒と物体が近づいたということは観察できるが、「物体に引かれたこと」が原因であるかどうか（別の原因によって近づいたのではないかどうか）を確かめるには、何度も同じことをやって同じ結果が生じるか観察しなければならない。当然その観察の間に時間が経過するが、「時間が経過してもこの棒やこの物体〔磁石〕の性質は同じだ」という前提が必要である。生物の場合、時間経過とともに性質が変化するから、この前提は自明ではない。

クワインによれば、人間の知識はネットワークをなしており、それは、<sup>ふち</sup>縁に沿ってのみ経験と接しているような1つの統合体である。そして、縁における経験との衝突はネットワーク内部での再調整をひき起こすが、どの命題を捨てるかに関して広い選択の幅がある。鉄の棒の例で言えば、その棒が磁石に引き付けられなかった場合、「この棒は鉄ではない」と判断する、つまり、元の命題Pを捨てるという選択以外に、「この物体は実は磁石ではなかった」とか「鉄のうちには、磁石に引き付けられない鉄もあるのだ」と判断して一般法則を修正するという選択など、幅広い選択肢がある。結局、クワインの全体論によれば、個別の経験と個別の命題は1対1に対応してはいない。

物理学における「原子」や数学における「集合」とか「集合の集合」とか「集合の集合の集合」などの高度に理論的な対象は、知識のネットワーク全体の中でも比較的中心的に位置している。それらは理論的な措定物 (posit) であり、その存在を観察によって直接検証することはできない。クワインによれば、

37) [Ayer 1936, p.20].

38) さらに「電流を流す」などの検証を加えていけば、命題Pの確からしさは一層高まるだろう。

それらの理論的措定物はギリシア神話の神々と同じである。どちらも直接検証できない理論的措定物だからである<sup>39)</sup>。とすれば、ハイデガーの「無は自ら無化する」というあの命題も、もし我々の知識のネットワークの中にしかるべき位置を持ち、他の命題としかるべき関連性を持つことができるなら、たとえ単独で検証できないからと言って、ただちに無意味だとは言えないということになる。こうして、クワインの全体論は検証原理から形而上学批判の力を奪ってしまった<sup>40)</sup>。

### 3 ストローソンの記述的形而上学

それでは、日常言語学派ライルによる形而上学批判の方はどうなったのか。

オックスフォード大学のライルの後任の教授はストローソン (Peter Frederick Strawson, イギリス, 1919 ~ 2006 年) だった。ストローソンは、『個体:記述的形而上学<sup>41)</sup>』(1959 年) という著書において、我々の概念構造 (conceptual structure) が持つ基礎的カテゴリーを探究した。彼は自分のその探求を「記述的形而上学 (descriptive metaphysics)」と名付けている。

ストローソンもライル同様「日常言語学派」に分類される。しかし、ストローソンのこの『個体:記述的形而上学』という著書には「言語分析の中に形而上学を持ち込む」という効果があった。それは、第1に、「形而上学」という名前がサブタイトルに付けられたことによってである。このことによって、哲学者たちは形而上学への関心を隠さなくてもよくなっただろうと推測されている<sup>42)</sup>。

第2に、ストローソンの仕事の持つ体系性を指摘できる。自分の仕事と従来の日常言語学派の概念分析との違いに関する彼の見解を要約すると次のようになる。「記述的形而上学は人間が持つ概念構造の最も一般的な特色を明らかにするのであって、この一般性の点で、これまでの概念分析と異なっている。即ち、歴史的に変化しないくらい最も根本的な特徴を明らかにするのである<sup>43)</sup>。」20世紀初頭のイギリスの分析哲学は、それまでのいわゆるイギリスヘーゲル学派 (ブラッドリーやマクタガートたち) の「観念論的で一元論的な哲学」への反動として「分析」を重視した<sup>44)</sup> が、その結果、「全体への考察」としての形而上学に対する拒絶反応を持つようになったのではないかと言う論者<sup>45)</sup>もいる。ストローソンの

39) したがって、のちのクワインの自然主義 (物理主義) はクワインの全体論からの論理的帰結ではない。では、なぜクワインは自然主義を主張するに至ったのか。ラッセル ([Russell 1912, Ch.2]) は「センスデータは直知の対象だが、物的対象の存在は本能的信念だ。」「本能的信念には強弱の違いがある。」「最も強い本能的信念から出発して取捨選択して調和的な体系を作るのが哲学の仕事だ」と言っているが、おそらくクワインにとって自然主義は彼の最も強い本能的信念だったのである。

40) [飯田 1996, p.271] や [Loux & Zimmerman 2003, p.4] は、クワインの論文「なにがあるのかについて」([Quine 1948]) が形而上学の復興をもたらしたと言う。この論文と「経験主義の2つのドグマ」([Quine 1951]) の2つが形而上学の復興に寄与したのは確かである。ただし、その後のクワインは、「哲学と自然科学の連続性」を主張する「自然主義」の立場へ行き、決して形而上学へは行かなかった。したがって、形而上学の復興へのクワインの貢献は限定的なものである。

41) [Strawson 1959].

42) [Loux & Zimmerman 2003, p.2].

43) [Strawson 1959, pp.9-10] を要約した。

44) [Mets 1938, p.535].

45) [Loux & Zimmerman 2003, pp.3-4].

仕事はそのような拒絶反応を和らげるものだったと思われる。

そして、彼は「物体 (body)」と「人物 (person)」を人間の概念構造の最も基礎的なカテゴリーとして取り出す。前述のロウが4カテゴリー論なら、ストローソンは言わば2カテゴリー論である。この点で、ストローソンはロウの先駆者だと言うことができる<sup>46)</sup>。

以上、20世紀末における形而上学の復興の4つの要因のうち3つを指摘したが、最大の要因は次に述べるクリプキの仕事だったと思われる。

#### 4 クリプキの固定指示詞と可能世界論

本論文第1節第3項での説明によっても明らかのように、エアは「必然=アプリアリ=分析的」および「偶然=アポステリオリ=総合的」という等式を自明視していた。これに対し、クリプキ (Saul Aaron Kripke, アメリカ, 1940年～) は、「名指しと必然性<sup>47)</sup>」(1972年)という論文において、必然性をアプリアリ性・分析性から切り離す。即ち、彼によれば、「必然的だがアポステリオリな真理」や「偶然的だがアプリアリな真理」が存在する。そして、このことによって、彼は、次の3つの概念の働く場面を明確に区別する。

形而上学的概念 (必然 / 偶然 / 可能)

認識論的概念 (アプリアリ / アポステリオリ)

意味論的概念 (分析的 / 総合的)

こうして形而上学的概念の自立性が確保されたのである。以下、説明しよう。

「必然的」とは「必ず成り立つ」ということであり、「アプリアリ」とは「経験によらずに正当化できる」ということであり、「分析的」とは「意味によって真」ということである。このように、これら3つは概念として区別できる。しかし、真理の範囲としては一致するとエアは考えていた。即ち、「必然的真理はみなアプリアリな真理でもあるし分析的真理でもある。逆に分析的真理はみなアプリアリな真理でもあるし必然的真理でもある」と考えていた。このような同一視は、「アプリアリで総合的な真理」の存在を主張した18世紀ドイツのカントを例外とすれば、ほとんどの哲学者によって共有されてきたのではないだろうか。

しかし、クリプキはこの同一視に疑いを投げかけた。即ち、「必然的だがアポステリオリな真理」や、逆に、「偶然的だがアプリアリな真理」があるのだと主張した。これはそれまでの常識をくつがえす驚くべき主張であった。もしクリプキが様相論理の公理系の完全性証明に初めて成功した論理学のエキス

<sup>46)</sup> 尤も、ロウ ([Lowe 1998a, p.6, n.4]) 自身はストローソンの記述的形而上学に対して批判的である。ストローソンはあくまでも「人間の概念構造」を記述するのだが、ロウの4カテゴリーは「世界そのものの構造」を記述するものだからである。ストローソンは「記述的形而上学」と「改作的形而上学 (revisionary metaphysics)」を区別したが、ロウは、「改作的形而上学は可能だ」と主張する。

<sup>47)</sup> [Kripke 1972].

パートでなかったら、彼の議論は誰にも相手にされなかったかもしれない。

クリプキのこの議論によって、「必然・偶然・可能」という様相概念は、「アプリアリ・アポステリアリ」という認識論的概念や「分析的・総合的」という意味論的概念に還元されない概念として、即ち、形而上学的概念として自立性を持てるようになったと言える。言わば、形而上学が認識論や意味論と関係を持ちつつも、それらに従属しないようになったと言えよう。この点で、クリプキの果たした役割は大きかったと思われる。

クリプキの議論のキーワードは「固定指示詞 (rigid designator)」である。固定指示詞とは「すべての可能世界で同一の対象を指示する語句」のことである。ただし、クリプキによれば、固定指示詞の指示対象は現実世界で決まる。

それでは、まず、「必然的だがアポステリアリな真理」について取り上げ、次に、「偶然的だがアプリアリな真理」について取り上げよう。

### (1) 必然的だがアポステリアリ (で総合的) な真理

そのような真理の例としてクリプキは「フォスフォラスとヘスペラスは同一の天体である」という真理を挙げる<sup>48)</sup>。

「フォスフォラス」(いわゆる「明けの明星」)と「ヘスペラス」(いわゆる「宵の明星」)が同じ天体だということを人類はかつて知らなかった。したがって、これは経験によらずには正当化できない真理、即ち、アポステリアリな真理である。

しかし、クリプキによれば、固有名 (proper name) は固定指示詞であり、すべての可能世界で同じ対象を指示する。そして、その指示対象は現実世界で与えられるから、「フォスフォラス」や「ヘスペラス」という固有名の指示対象は金星であり、これらの固有名はどの可能世界でも金星という同一の天体を指示する。したがって、「フォスフォラスとヘスペラスは同一の天体である」という命題は「金星は金星と同一の天体である」という自己同一性を意味し、すべての可能世界で成り立つ。「すべての可能世界でなりたつ」とは、即ち、必然的真理だということである。それゆえ、「フォスフォラスとヘスペラスは同一の天体である」という真理は、アポステリアリでありながら必然的な真理だということになる。クリプキはこう主張する。

これに対し、2つの確定記述 (definite description) によって表現された同一性は必然的ではない。例えば、「明け方に東天で最も輝く星と夕方に西天で最も輝く星は同一の天体である」という命題は偶然的でアポステリアリ (で総合的) な真理を表している。なぜか。

「明け方に東天で最も輝く星」や「夕方に西天で最も輝く星」は金星を指示する確定記述であり、現実世界ではこれらの確定記述は金星という同一の天体を指示している。しかし、そのことを人類は経験によって知ったから、これはアポステリアリな真理である。ここまでは固有名の場合と同じである。

しかし、クリプキによれば、確定記述は固定指示詞ではない。それゆえ、その指示対象はそれぞれの

<sup>48)</sup> [Kripke 1972, p.104 = 邦訳 p.125].

可能世界で異なっているかもしれない。言い直せば、「明け方に東天で最も輝く星」が金星でなかった可能性がある。たとえば、太陽系の歴史の進み具合によって、金星がハレー彗星と衝突して消滅し、ハレー彗星の2つのかけらが同一の軌道を回るようになっていたかもしれない。そのとき、一方のかけらは明け方に東の空で輝き、もう一方のかけらは夕方に西の空で輝くようになったかもしれない。このような事態は想定可能であるから、「明け方に東天で最も輝く星と夕方に西天で最も輝く星は同一の天体である」という真理は偶然的真理だということになる<sup>49)</sup>。

次に、「偶然的だがアプリアリな真理」について取り上げよう。

## （2）偶然的だがアプリアリ（で分析的）な真理

そのような真理の例としてクリプキは「1メートルは時点 $t_0$ におけるメートル原器の長さである」という真理を挙げる<sup>50)</sup>。なお、ここでは、「メートル」は固有名で、「時点 $t_0$ におけるメートル原器の長さ」は確定記述だと仮定しておこう。

かつて「メートル」という単位はパリにあるメートル原器によって定義されていた。この例はそのころの話である。金属は温度によって長さが変わるから、ちょうど時点 $t_0$ のときの長さが「1メートル」を定義しているとしよう。このとき、「1メートルは時点 $t_0$ におけるメートル原器の長さである」は定義であるから、経験によらずに正当化できる真理、即ち、アプリアリな真理である。

そして、「メートル」は固有名であるから、すべての可能世界で同じ特定の長さを指示する。しかし、時点 $t_0$ において、メートル原器がその特定の長さであったことは必然ではない。なぜなら、時点 $t_0$ において温度が実際の温度とは違う温度であったことも可能だったからだ。つまり、異常なほど気温が高く、そのときのメートル原器の長さが実際よりも少しだけ長かったという可能性がある。それゆえ、「1メートルは時点 $t_0$ におけるメートル原器の長さである」はアプリアリだけれども偶然的な真理だということになる<sup>51)</sup>。

クリプキの議論は、「固有名」や「確定記述」という言語表現に関する議論として読むことも、「固定指示」という様相的文脈における指示のあり方に関する議論として読むこともできる。たとえ固有名が固定指示詞でないとしても、少なくとも、我々が必然性について語るとき「固定指示」と呼べるような指示の仕方をしている場合があることは認めてよいだろう。したがって、「固有名」に関する議論と「固

<sup>49)</sup> これに対し、「その場合、それらのかけらは『フォスフォラス』や『ヘスペラス』と呼ばれるようになったのではないか。つまり、固有名の場合も偶然的同一性なのではないか」と反論されるかもしれない。しかし、その場合、金星が「フォスフォラス」と呼ばれなくなったということである。固定指示詞の指示対象は現実世界で決まるから、「フォスフォラス」の指示対象はあくまでも金星である。したがって、その想定は（現実世界にいる我々の呼ぶ）「フォスフォラス」という星（即ち金星）が「フォスフォラス」と呼ばれないという想定であり、可能な想定ではあるが、「人々が『フォスフォラス』と呼ぶ星」は固有名ではなく、確定記述である。彼らは、フォスフォラス（＝金星）でないもの（ハレー彗星のかけら）を「フォスフォラス」と呼んでいるのである。[Kripke 1972, p.109 = 邦訳 p.131] を参照せよ。

<sup>50)</sup> [Kripke 1972, p.56 = 邦訳 p.65]。

<sup>51)</sup> そのとき、その可能世界での「1メートル」は我々の1メートルとは長さが異なる。しかし、そのことが意味するのは、彼らは1メートルでないものを「1メートル」と呼んでいる、ということである。現実世界の方が優位なのである。ここにクリプキの現実世界優先の姿勢が現れている。

定指示」に関する議論は切り離して評価すべきである。そして、後者の議論が、20世紀末以降の分析哲学において形而上学を認識論や意味論から自立させる上で大きな役割を果たしたことは確かであろう。

以上の、1「検証原理が元々持っていた難点」、2「クワインの全体論」、3「ストローソンの記述的形而上学」、4「クリプキの固定指示詞と可能世界論」の4つの要因によって、カルナップ、エア、ライルたちによる形而上学批判は次第に力を失い、こんにちの形而上学の復興につながっていったのだと考えられる。

#### IV メタ形而上学

分析形而上学が生まれたのは1980年前後だが、2000年前後から分析形而上学はみずからの根拠についての方法的反省をもおこなうようになってきた。それがメタ形而上学 (metametaphysics) である。

分析形而上学における論証は何によって正当化されるのか。パーフィットのセレクター論にあるように、最終的に生の事実<sup>なま</sup>に突き当たるのであれば、(生の事実とは説明を持たない事実であるから、) 分析形而上学における論証は最終的には直観に依拠することになるのか。それとも、他の学問の場合と同様な「より良い理論を選択するための基準」(例えば、論理的整合性・説明の包括性・未定義概念の少なさ・論証の単純性・既存の知識の保存・他分野の知識との整合性・常識との整合性など<sup>52)</sup>) によって正当化することができるのか。これらの問題がメタ形而上学において議論されている<sup>53)</sup>。

メタ形而上学での議論や本論文で紹介したヴァン・インワーゲン、ロウ、パーフィットたちの議論を見ると、分析形而上学が単なる先祖がえりではないことが分かる。確かに、扱われるトピックは古代中世以来の伝統的なものである。しかし、それらのトピックを扱う方法は、この100年間の分析哲学の蓄積を踏まえている。その意味で新しい形而上学が生まれたのだと見るべきであろう。まだ生まれたばかりである。メタ形而上学による方法的反省に耐えて育てていけるかどうかはこれから先の話である。

#### 文献表

- Ayer, Alfred Jules (1936) *Language, Truth, and Logic*, 2nd ed. 1946, Harmondsworth: Penguin Books, 1971.  
 (邦訳: A. J. エイヤー『言語・真理・論理』吉田夏彦訳, 岩波書店, 1955年.)  
 ——— (1977) *Part of My Life*, Oxford University Press.  
 ——— (1978) "Logical Positivism and its Legacy: Dialogue with A. J. Ayer," in Bryan Magee, *Men of Ideas: Some Creators of Contemporary Philosophy*, British Broadcasting Corporation, pp.116-133, Ch.6. (邦訳: 「論

<sup>52)</sup> これらの基準は必ずしも両立しない。例えば、未定義概念が少ないほど、定義すべき概念が増えるから、論証は複雑になる。

<sup>53)</sup> その議論の一端は [Chalmers 2009] からうかがうことができる。

- 理実証主義とその遺産」ブライアン・マギー編『哲学の現在：世界の思想家一五人との対話』磯野友彦訳、河出書房新社、1983年、pp.135-154、第6章。）
- (1987) “Reflections on *Language, Truth and Logic*,” in *Logical Positivism in Perspective: Essays on Language, Truth, and Logic*, edited by Barry Gower, Croom Helm, 1987, pp.23-34, Ch.1.
- Baldwin, Thomas (1996) “There might be nothing,” *Analysis*, vol.56, no.4, pp. 231-238.
- Carnap, Rudolf (1932) “Überwindung der Metaphysik durch logische Analyse der Sprache,” *Erkenntnis*, Band 2, S.219-241; translated by Arthur Pap “The Elimination of Metaphysics through Logical Analysis of Language,” in *Logical Positivism*, edited by A. J. Ayer, The Free Press, 1959, pp.60-81, Ch.3. (邦訳：カルナップ「言語の論理的分析による形而上学の克服」内田種臣訳、ルドルフ・カルナップ『カルナップ哲学論集』永井茂男・内田種臣編、紀伊國屋書店、1977年、pp.9～33.)
- Chalmers, David John, David Manley, and Ryan Wasserman (eds.) (2009) *Metametaphysics: New Essays on the Foundations of Ontology*, Oxford University Press.
- Conee, Earl (2005) “Why Not Nothing?” in *Riddles of Existence: A Guided Tour of Metaphysics*, by Earl Brink Conee & Theodore Sider, Oxford University Press, pp.87-111, Ch.5. (邦訳：アール・コニー「何かがあるのはどうしてか」、アール・コニー、セオドア・サイダー『形而上学レッスン—存在・時間・自由をめぐる哲学ガイド』小山虎訳、春秋社、2009年、pp.125～161、第5章.)
- Heidegger, Martin (1929) “Was ist Metaphysik?” in *Was ist Metaphysik?* Vittorio Klostermann, 1960. (邦訳：マルティン・ハイデッガー「形而上学とは何か」大江精志郎訳、『ハイデッガー選集1』理想社、1961年.)
- 伊佐敷隆弘 (2012) 「ロウの4カテゴリー—存在論(1)」宮崎大学教育文化学部『紀要 人文科学』第27号、pp.1～14.
- 飯田隆 (1992) 「訳者あとがき」、W. V. O. クワイン『論理的観点から：論理と哲学をめぐる九章』勁草書房、pp.271～273.
- Kripke, Saul Aaron (1972) *Naming and Necessity*, Harvard University Press. (邦訳：ソール A. クリプキ『名指しと必然性：様相の形而上学と心身問題』八木沢敬、野家啓一訳、産業図書、1985年.)
- 桑木巖翼 (1936)『哲学及哲学史研究』岩波書店.
- Leibniz, Gottfried Wilhelm (1697) “De Rerum Originatione Radicali,” in *Opera Philosophica Omnia*, edited by Renate Vollbrecht, Scientia Verlag Aalen, 1974, XLVIII. (邦訳：ライプニッツ「事物の根本的起原」清水富雄訳、『世界の名著30 スピノザ・ライプニッツ』下村寅太郎編、中央公論社、1980年、pp.495～503.)
- Leslie, John (1979) *Value and Existence*, Basil Blackwell.
- Lewis, David (1986) *On the Plurality of Worlds*, Basil Blackwell.
- Loux, Michael J. & Zimmerman, Dean W. (2003) “Introduction,” in *The Oxford Handbook of Metaphysics*, edited by Michael J. Loux & Dean W. Zimmerman, Oxford University Press, pp.1-7.
- Lowe, Edward Jonathan (1996) “Why Is There Anything at All?” *Proceedings of the Aristotelian Society*, vol.70, pp.111-120.
- (1998a) “The Possibility of Metaphysics,” in *The Possibility of Metaphysics: Substance, Identity, and Time*, Oxford University Press, pp.1-27, Ch.1.
- (1998b) “The Puzzle of Existence,” in *The Possibility of Metaphysics: Substance, Identity, and Time*, Oxford University Press, pp.248-259, Ch.12.
- (2002) “Metaphysical nihilism and the subtraction argument,” *Analysis*, vol.62, no.1, pp.62-73.
- (2006) *The Four-Category Ontology: A Metaphysical Foundation for Natural Science*, Oxford University Press.
- Mets, Rudolf (1938) *A Hundred Years of British Philosophy*, translated by J. W. Harvey, T. E. Jessop, and Henry Sturt, edited by J. H. Muirhead, George Allen & Unwin Ltd, The Macmillan Company.
- Nozick, Robert (1981) “Why Is There Something Rather Than Nothing?” in *Philosophical Explanations*, Harvard University Press, pp.115-164, Ch.2. (邦訳：ロバート・ノージック「なぜ何もないのではなく、ものがあるのか？」戸田山和久訳、『考えることを考える 上巻』坂本百大監訳、青土社、1997年、pp.171～258、第二章.)
- Parfit, Derek (1991) “Why Does the Universe Exist?” *The Harvard Review of Philosophy*, vol.1, no.1, pp.4-5.
- (1992) “The Puzzle of Reality: Why does the Universe Exist?” *Times Literary Supplement*, pp.3-5; reprinted in *Metaphysics: The Big Questions*, edited by Peter Van Inwagen and Dean W. Zimmerman, Blackwell, 1998, pp.418-427.
- (1998) “Why anything? Why this?” *London Review of Books*, vol.20, no.2 (January 22, 1998), pp.24-27, no.3 (February 5, 1998), pp.22-25; reprinted in *Metaphysics: A Guide and Anthology*, edited by Tim Crane

- and Katalin Farkas, Oxford University Press, 2004, pp.12-30.
- Paton, Herbert James (1961) "Fifty Years of Philosophy," in *Contemporary British Philosophy - Third Series*, edited by H. D. Lewis, Allen & Unwin.
- Quine, Willard Van Orman (1948) "On What There Is," in *From a Logical Point of View*, Harvard University Press, 1953, pp.1-19, Ch.1. (邦訳: W. V. O. クワイン「なにがあるのかについて」飯田隆訳『論理的観点から: 論理と哲学をめぐる九章』勁草書房, 1992年, pp.1 ~ 29, 第I章.)
- (1951) "Two Dogmas of Empiricism," in *From a Logical Point of View*, Harvard University Press, 1953, pp.20-46, Ch.2. (邦訳: W. V. O. クワイン「経験主義のふたつのドグマ」飯田隆訳『論理的観点から: 論理と哲学をめぐる九章』勁草書房, 1992年, pp.31 ~ 70, 第II章.)
- Rescher, Nicholas (1984) *The Riddle of Existence: An Essay in Idealistic Metaphysics*, University Press of America.
- Ryle, Gilbert (1932) "Systematically Misleading Expressions," in *Collected Papers volume 2: Collected Essays 1929-1968*, Routledge, 2009, pp.41-65, Ch.3. (邦訳: ギルバート・ライル「系統的に誤解を招く諸表現」野家啓一訳, 『現代哲学基本論文集Ⅱ』坂本百大編, 勁草書房, 1987年, pp.155 ~ 201.)
- Schlick, Moritz (1931) "The Future of Philosophy (1930)," in *Proceedings of the Seventh International Congress of Philosophy, held at Oxford, 1930*, London 1931, pp.112-116; reprinted in Moritz Schlick, *Philosophical Papers Volume 2 (1925-1936)*, eds. by H. Mulder and Barbara F. B. van de Velde-Schlick, D. Reidel Publishing Company, 1979, pp.171-175, Ch.9.
- Strawson, Peter Frederick (1959) *Individuals: An Essay in Descriptive Metaphysics*, Methuen. (邦訳: P. F. ストローソン『個体と主語』中村秀吉訳, みすず書房, 1978年.)
- van Inwagen, Peter (1996) "Why Is There Anything at All?" *Proceedings of the Aristotelian Society*, vol.70, pp.95-110; reprinted in *Ontology, identity, and modality: Essays in metaphysics*, Cambridge University Press, 2001, pp.57-71, Ch.4. (邦訳, ピーター・ヴァン・インワーゲン「そもそもなぜ何かがあるのか」柏端達也, 青山拓央, 谷川卓訳, 『現代形而上学論文集』勁草書房, 2006年, pp.57 ~ 84.)

※本論文は, 日本イギリス哲学会 (2012年平成24年3月28日国際基督教大学にて開催) におけるシンポジウムでおこなった報告に基づいている。その際さまざまご指摘をしてくださった会員の皆様に感謝したい。また, 本研究は科学研究費補助金 (挑戦的萌芽研究, 課題番号 25580004 「分析哲学における存在論の復権に関する思想史的研究」) による成果である。